

## 5 魔法にかかった騎士

つれなき 麗<sup>うるわ</sup>しの妖精に眠らされた騎士が  
暮れゆく丘の麓の冬枯れの森に横たわっている  
そこに鋤<sup>すき</sup>の音が近づき 黒い影が流れ  
騎士を越え平原を過ぎて行けど 騎士はじっと動かない

長い時を重ねて 錫<sup>さび</sup>が綺麗な花園を創り出し  
鎧<sup>よろいかぶと</sup>兜<sup>よろいかぶと</sup>に秋の野花を咲かせている  
洒落た胸当てから鉄の籠手<sup>こて</sup>にかけては蜘蛛の巣が張り  
まるで幻の盾<sup>たて</sup>を構えているかと思わせる

無数の足音が耳元の芝地を踏みしめるとき  
切れ目無く続く大軍が騎士の夢の中を行進し  
一人また一人と 昔の味方<sup>とも</sup>が現れる  
一日中途切れることなく しかし 騎士は合図を送れない

静かな木立の中で一羽の鳥が鳴く  
久方ぶりのその鳴き声が消えると 騎士は立ち上がって  
後を追おうとする だが 冷たくなった手足は動かず  
芝地の上で身動きならず 騎士の影は横たわったまま

しかし 一片<sup>ひとひら</sup>の枯れ葉が舞い  
騎士の顔に止まって張り付くと  
恐怖の冷たい生汗<sup>なまあせ</sup>が額に滲む<sup>にじ</sup> 今や 騎士は虚しくも  
胸押し潰さんとするその屈辱<sup>おもし</sup>の重石を払わんとするのであった

(山中光義訳)